

都市のなかの「むら」

——ジャカルタにみる婚姻形態——

はじめに

「社会的距離測定法」(social distance scale) というのがある。ボガードスという人が半世紀以上も前に提唱したもので、その後改良が加えられ、現在では、スケール法に基づく社会心理学の古典的な態度測定法とみなされている [Bogardus 1925 ; Selltitz et al. 1976:421-422]。アメリカで、人種的偏見に関する研究などに盛んに用いられた。

測定法の内容は、基本的には簡単である。質問紙の一方に「英国人」、「黒人」、「フランス人」、「中国人」、「ロシア人」といった、人種ないし国民名称のカテゴリーが列挙されている。もう一方には、「自分の国から締出す」、「自分の国に訪問者として受入れる」、「自分の国の市民権を与える」、「自分の職場に受入れる」、「自宅近くの隣人として受入れる」、「自分の属するクラブに受入れる」、「婚姻による近しい親戚として受入れる」といった、関わりの深さ浅さを示す項目が並んでいる。列記された人種・国民カテゴリーに属するごく「平均的」人々を頭に描き、これらの人々とどこまで関係の深さをもつ心情的用意があるかないかを尋ねるのが、ボガードスの測定法である。たとえば、「平均的黒人」に対する親近・忌避の感情的度合を、「自分の職場に受入れてもよい」と思うほどか、あるいは「自分の国から締出したい」と思うほどかなどの項目選択によって示す。

「社会的距離測定法」においては、関わりの深浅を表示する質問項目は、物差しのように単線上の一つのスケールを形成するとみなされる。そして、上の例でいえば、「自国からの排除」が負の極端を示すものであり、「姻戚関係」が正の極端を画するものであるとされる。

社会的距離測定法に関して、果してこれがスケールを構成しているのか、あるいは人種・国民カテゴリーの設定は、職業、宗教などを取り入れた多角的なものにするべきではないのかなど、種々の批判があることであろう。批判は批判として、少なくとも結婚を媒介とする関わり——それが姻戚関係にしる自身自身の結婚にしる——への対応が、ボガードスの想定するように、われわれにとって多くの場合、自他を弁別する際の最も峻厳な判断基準を含むことに、大方の異存はないのではないだろうか。それも、この判断基準が、単に「わたし(たち)」と「かれら」との相対的な社会的距離を示すだけではなく、しばしば自他の質的弁別をも意味することは、日常生活や小説・映画などの想像世界をとおして、われわれにとって馴染みの深い経験である。婚姻という状況は、たとえ仮定の状況設定下ではあっても、いつもは潜在化しているかもしれない集団間の境界を、意識の上に顕在化させてくれる作用がある。

婚姻は、いうまでもなく、個人的かつ同時にすぐれて社会的決断であり行為である。そこには、親近感や恋愛感情といった個人の生の情感だけではなく、社会的許容や承認への配慮がつねに働く。個人の情感さえ、大きくは社会や文化に規定されることを考えるとき、社会的行為としての婚姻の意味がより明確に理解されよう。恋愛結婚、すなわち愛情による個人と個人の結び付きを一つのイデオロギーのように信奉するアメリカにおいてさえ、統計的にはホモガミー (homogamy)、すなわち同一の社会・文化的属性を共有する人々が結婚する、という傾向の生じてくるのも、こうしたことに起因している。

本稿では、上記のような婚姻の意味を念頭におきつつ、インドネシアの首都ジャカルタにおける婚姻形態について考察してみたい。それも、とくに、種族を中心とする婚姻形態について考えることとする。

周知のように、インドネシアは多民族国家である。かつて、H. ギアツは、「インドネシアの都市ほど、『複合社会』(plural society)という言葉があてはまるケースはない」と述べたが [Geertz 1967:34]、まさに都市は、インドネシアの種族的多様性を凝縮した形で具現している。なかでも、首都ジャカルタには、インドネシア諸地方からの移住民が集中する。たとえば、1971年センサスを

もとにした計算によると、ジャカルタ人口の3人に2人は、地方出身者ないしその子供であろうとの推計である [Speare 1975:68]。「都市のなかの国」ともいわれるほど、ジャカルタはその人口構成において、多民族国家インドネシアを反映している [Mertens 1976]。

この種族的に多様な都市ジャカルタにおける、種族内ないし種族間の婚姻形態を概観しようというのが、本稿の目的である。多民族社会・多民族社会において、民族意識・種族意識が目に見えた形で顕現する身近な場、それが婚姻である。ジャカルタというコスモポリタンな生活空間を共有する人々の間で、種族という境界が婚姻においてどこまで存在するのか、そしてそれはどのように変容をとげているのか。¹⁾

結婚相手の選択は、ジャカルタにおいてといえども、もとより極めて限定された生活空間のなかで行なわれる。たとえ同一種族間の婚姻であっても、結婚相手の選定は、籤引きのごとく無作為になされるのではなく、日頃の交友ネットワークとの関わりにおいてなされるのが普通である。ジャカルタに数多く住む地方出身者の婚姻形態を観察することにより、かれらの生活空間の特徴や広がりについても、ある程度の感触を得たいというのが、本稿の第二の目的である。いわば、移住民の出身地におけるような「むら」的生活空間が、果してジャカルタにも認められるのかという疑問である。

I 事例報告の概観

ジャカルタを含むインドネシア都市部における婚姻形態に関して、残念ながら今までのところ、研究成果の積重ねはほとんどみられない。私が調べた限りでは、種族別の婚姻形態を中心に据えた研究成果が無いだけでなく、二次的にもこの問題に触れる研究さえ、皆無といってよい状態である。センサスその他の政府機関によって集計されたデータも、インドネシアの独立後は“種族”を質問項目として扱っていないため、ここでの問題意識に応える情報を提供しはくれない。夫婦の出生地域といった、ある程度出身種族を示唆するような

統計資料さえ、私の知る限り存在しない。文献調査の段階でもう一つ判明したことは、ジャカルタに関する従来の都市研究には、まったくといってもよいほど、婚姻形態についての言及が無いことである。都市貧困層、人口移動、人口構成、いわゆるインフォーマル・セクター (informal sector) など、ジャカルタに関する研究成果には近年目覚ましいものがある。²⁾ しかしこれらの研究も、婚姻形態に関しては黙して語らない。

インドネシアの1980年センサスによると、ジャカルタの人口は650万である。このように大きな対象全体を射程内に入れ、包括的に扱った研究成果が存在しない以上、ミクロな対象に焦点を当てた事例研究の結果を点検しつつ、これからの作業を進めていかざるをえない。以下では、これまでジャカルタについてなされた研究のうち、特定サンプルの婚姻形態に言及する幾つかの調査報告から、とりあえず種族間婚姻形態の概観を手探りしてみたい。具体的には、ジャカルタ在住カップルの種族的背景の比較と、ジャカルタで結婚した夫婦の婚姻形態という2種類のデータを検討する。まず、前者のデータをみてみよう。

事例研究においては、なんらかの形で調査対象を絞りこむ必要がある。表1は、在ジャカルタの施設ないし機関、この場合は学校によって、調査対象を絞りこんだ例である。この学校は、南ジャカルタにあるイスラーム塾アシシャフイーヤ (Asyshafi'iyah) で、表には、この学校の男女生徒 (主として高等学校レベル) のサンプル186人について、彼らの両親の種族的背景が示されている。総ての親がジャカルタに住んでいるわけではないが、その大部分、86%がジャカルタ住いであり [Jusuf 1973:55]、全体としてジャカルタ在住者のサンプルとみなしてもよいであろう。表1によると、一般に高い率の種族内婚が認められ、全体で88%が同一種族間の結婚である。なお、生徒の父親の職業を述べると、ほぼ半分近くが商人であり、約20%が公務員である。³⁾

本稿の問題関心にいくらかでも注意を払っているデータ源として、ジャカルタ在住の特定種族に関する研究がある。表2は、ジャカルタ在住の幾つかの種族に関する調査から、種族内婚の割合を列挙したものである。ほとんどの調査は、インドネシア大学の修士論文のために行なわれたもので、既述のよう

表1 アンジャフィヤ塾生の両親の種族的背景 (1972年)

母親 父親	バウ	スンダ	ジャワ	マ ウ ラ	バンジ ャール	ラン ボ	ミナン カバウ	リアウ	パレン ン	マラヤ	アラブ	インド	合 計
	タイ												
バタウィ	108	9	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	119
スンダ	6	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	34
ジャワ	2	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11
マドゥラ	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	2
バンジ ャール	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2
ランボン	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
ミナン カバウ	—	1	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	6
リアウ	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2
パレン ン	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
マラヤ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
アラブ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	4
インド	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
合 計	116	40	10	1	1	3	5	2	1	1	4	2	186

出典：Jusuf [1973:60].

に、本稿の主題に関わる調査が、政治的にも問題の多い種族意識を扱うこともあって、今までのところあまり注目されなかったことを物語っている。

都市での調査においては、農村部における調査と比べると、たとえ調査対象を一つの種族に限定したとしても、そのサンプルの選定が難しい。次頁の表2に引用した調査は、大別二つの方法のいずれかで、この問題に対処している。一つは、ジャカルタの一定地域に焦点をあて、そこに多く住む特定のある種族を調査する方法である。それも、職業などの関係から、当該種族がとくに多く固まって住んでいるような地域での調査である。表2でいえば、サンギル・タラウッドからブギスまでの四つの調査がこれにあたる。クルラハン(kelurahan)という、地方でいえば「むら」に相当する行政単位かそれより小さな単位を取りあげ、その地域の末端行政長の保管する居住者台帳や、当該種族がキリスト教徒の場合は教会組織、さらには同郷会などをおして、特定種族に接近する方法である。サンギル・タラウッドからブギスまでの4種族は、大部分の人が水夫など海と関係した職業についており、そのため港のある北ジャカルタのタンジュン・プリウック地域(Tanjung Priuk)に数多く住んでいる。⁴⁾

表2 ジャカルタ在住諸種族に関する事例研究と種族内婚率

出身種族/出身地域	種族内婚率	サンプル数	調査年	出典
サンギル・タラウッド	81%	191	1963	Suparlan [1963:134]
ゴロンタロ	82%	62	1969	Amali [1970:111]
ミナハサ	96%	500	1969	Sis [1970:39-40]
ブギス	54%	217	1977	Roosmalawati [1979:107]
ミナンカバウ	86%	299	1970	Naim [1979:195]
トバ・バタック	100%	56	1976	Pandjaitan [1977:86, 93]
マドゥラ	100%	113	1971	Lobarnebal [1973:112-114]

これに対して、トバ・バタック (Toba Batak) とマドゥラ (Madura) に関する調査は、ジャカルタにおいて特定種族の専売業のようになっている職業を選び、その職業に従事している人から、当該種族に属する人々を手繰っていくやり方である。トバ・バタックの場合には、イナン・イナン商人とって、この種族の女性に多い担ぎ屋業を手掛かりに調査を実施している。イナン (inang) というのは、文字どおりには「オバさん」ないし「乳母」のことであるが、密輸商品の担ぎ屋兼商人のことを指す。もともとは、インドネシアの日本軍占領時代に、生活苦からトバ・バタックの女性が、シンガポールとメダンの間で始めたのが起こりらしい。マドゥラの場合は、サテ・マドゥラ (sate Madura) とって、屋台の串焼き売りである。ジャカルタには多くの串焼き売りがいるが、その中でもマドゥラ出身者の串焼きは、たれや仕込みに秘密があり、とくに美味しいことで有名である。

二つの方法ともに、ジャカルタ在住の特定種族をどこまで代表することができるか問題のあるところではあるが、どちらの方法がより適性かの判断は、ジャカルタ内での当該種族の特徴を考慮しつつなされるべきものである。たとえば、在ジャカルタ・マドゥラ人の数はまだ少なく、職業も串焼き売りに集中している。しかし、イナン・イナン商人の場合は、彼女らがジャカルタに数多く住むトバ・バタック人を代表するとはいい難い。なお、表2のうちミナンカバウに関する調査は、上の二つの方法のいずれにも属せず、ジャカルタ内居住地域やジャカルタでの職業による限定をつけずに、調査者の知人・友人からさらにはその知己へとアンケートを配り、調査を実施したものである。

表2の結果であるが、ジャカルタ在住のこれら種族の婚姻形態をみる限り、種族内婚の率は高いといえる。唯一の例外はブギスであるが、これについてはあとで検討することにする。なお、ここで確認しておくべきは、表2そして表1にも共通する限界で、表の数字はあくまでジャカルタ在住カップルの種族的背景の比較であり、彼らの結婚が、果してジャカルタでとり行なわれたものなのかどうかの区別はなされていない。

表2の調査で種族外婚の形はどういうものかを述べると、サンギル・タラウッドの場合、男女を問わず種族外婚の四割が、出身地も近く同じキリスト教徒であるミナハサ族との結婚であり、他の四割が、サンギル・タラウッドの男性とスンダ(Sunda)ないしジャワの女性との結婚である。ゴロンタロ(Gorontalo)とミナハサでは、種族外婚の相手として卓越したグループはみられないが、スンダ、ジャワ、マカッサル(Makassar)などの名があげられる。ミナンカバウについては、この点に関する言及が調査報告においてなされていない。また、ブギスにおいては、種族外婚の87%が、スンダないしジャワの女性との結婚である[Roosmalawati 1979:107]。ブギスの種族外婚について、調査者のあげている説明は、表2の結果の限界をも指摘しているので、ここで少し検討してみよう。

ロースマラワティによると、種族外婚者の大部分は、ジャカルタに来たとき独身であった男性達で、その後ジャカルタで結婚相手を見つけた事例である。ジャカルタでは独身のブギス女性を見付けがたいというほかに、ここには婚資(uang naik)の問題がある。ブギスの婚姻においては、男から女へ多額の婚資が必要とされる。ブギスの故郷南スラウェシでは、この婚資は男性の親族全体の協力によって支払われるものの、親族から遠く離れてジャカルタに住む者は、自分自身で婚資の都合をつけなければならない。ゆえに、ジャカルタにやって来たブギス独身男性は、この地に多いスンダやジャワの女性と結婚することになるというものである[*ibid.*: 107-108]。ただし、種族外婚をしたブギス男性の間にあっても、ブギス女性と結婚することが理想とされており、自分に経済的余裕のできた後に、ブギス族の女性とも結婚すること、つまり一夫多妻婚の

多々あることが、ロースマラワティによって指摘されている。彼女のサンプルでは、34%の人が一夫多妻婚で、そのうち12%（一夫多妻婚全体の32%）が、ブギス女性を第二夫人とする人達である。なお、一夫多妻婚者のなかには、第一夫人のブギス女性を故郷の南スラウェシにおいたままジャカルタに出掛け、スنداやジャワ女性を「現地妻」の第二、第三夫人としている人々も含まれている [loc. cit.].⁵⁾ タンジュン・プリウックのブギス人には、船乗りとしてジャカルタ＝南スラウェシ間を往復する人が多く、こうした結婚生活も可能なのであろう。

ブギスの事例は、たとえ実際の種族内婚率が低いとしても、依然として理念としての種族内婚志向が強い可能性を示唆しているとともに、ジャカルタ内においてとりかわされる婚姻形態それ自体について、個別に検討する必要性のあることをも指し示すものである。ジャカルタ在住カップルのなかには、ジャカルタで結婚した人もその他の地で結婚した人も含まれている。結婚の時期にしても、ジャカルタ到来以前の人もいれば以後の人もいるというように、まちまちである。確率的には、ジャカルタ到来以前の結婚は、移住者の故郷で挙げられている可能性が強く、当然種族内婚の圧倒的に多いことが予想される。

上の点をも勘案した調査結果は、残念ながらジャカルタ在住者の婚姻形態に関するそれよりさらに数が少ない。表2に引用した調査でいえば、サンギル・タラウッドとゴロンタロのわずかに二つにしかすぎない。それによると、1955年から1963年の間にジャカルタで挙げられたサンギル・タラウッドの結婚49件、同様の1960年から1969年にかけてのゴロンタロの結婚8件のうち、種族内婚はそれぞれ94%と50%であった [Suparlan 1963: 133; Amali 1970: 109-110]。種族外婚の数は両者とも男女半々であり、その結婚相手は、サンギル・タラウッドではミナハサが多く、ゴロンタロではスندا、ジャワ、アンボン (Ambon)、ブギスとまちまちである。ゴロンタロの結果は、先のブギスのケースと同じく、必ずしも高い種族内婚率を示していない。事例の数が少ないということもあるのであろう、この点に関して、調査者のアマリはなんら説明を加えていない。サンギル・タラウッドについては、ジャカルタにおける結婚においても、明ら

かに高い率の種族内婚がみられる。

統計資料は呈示されていないが、ジャカルタで挙げられる結婚において、種族内婚が卓越することは、トバ・バタックについても認められている。パンジャイタンによると、彼女の属する HKBP (Huria Kristen Batak Protestan バタック・プロテスタント協会) 系のラワマングン (Rawamangun) 教会支部では、未だかつてラワマングン地区のトバ・バタックが、ジャカルタで他の種族と結婚したという話を聞いたことがないという [Pandjaitan 1977: 66-67]。また、ロバルヌバルによると、首都在住マドゥラ人既婚者のなかには、ジャカルタで結婚式を挙げた人さえないということで [Lobarnebal 1973:125]、これまたマドゥラ出稼ぎ人の場合も、故郷での種族内婚の一般的なことを示唆している。

以上、質量ともに限られたデータをもとにしての概観ではあるが、ジャカルタにおける種族をめぐる婚姻形態について、およそ次のようなことがいえそうである。すなわち、一般的にジャカルタでは種族内婚率が高い。それは、まず、ジャカルタを「ふるさと」とするバタウィ族を含めて、ジャカルタ在住カップルの間に広くみられる。この傾向は、これまでにあげた調査以外にも、ラハルジョ等が 1974 年に行なった家族計画についての調査結果にもあらわれている。それによると、ジャワ、スンダ、バタウィ、スマトラ出身者、ミナハサ、華人等を含む 146 人のジャカルタ在住既婚女性に関して、「彼女らの父母および夫の種族的背景に関する解答結果は、異種族間結婚の様相 (存在) を示している。しかし、その割合はそれほど大きくはない」というものである [Rahardjo and Papanek 1980:27]。

ジャカルタに住む人々は、顔のない民衆の寄せ集めではない。種族内婚が、ジャカルタ到来以前に結ばれたのかあるいは到来以後に結ばれたのかにかかわらず、ジャカルタには、“同質の種族的・文化的背景を分かち持つ家族”という生活空間が想定できる。さらに、ジャカルタで挙行される結婚も、種族内婚への志向が強い。種族的・文化的に齊一な家族が、外からジャカルタへ流れ込むだけでなく、こうした家族がジャカルタのなかでも、多くの場合再生産されているということである。

表3 ジャカルタの種族・民族別人口に関する推計値 (1961年)

出身種族/出身地域	人口	百分率
バタウィ	655,400	22.9
スンダ	952,500	32.8
ジャワ/マドゥラ	737,700	25.4
アチュ	5,200	0.2
バタック	28,900	1.0
ミナンカバウ	60,100	2.1
南スマトラ	34,900	1.2
バンジャール	4,800	0.2
南スラウェシ	17,200	0.6
北スラウェシ	21,000	0.7
マルク/イリアン	11,800	0.4
東サトウガラ	4,800	0.2
西サトウガラ	1,300	0.0
バリ	1,900	0.1
ムラユ/外島他地域	19,800	0.7
不明	38,600	1.3
華人	294,000	10.1
その他	16,500	0.6
合 計	2,906,500	100.0

出典: Castles[1967:185].

種族外婚についていうと、表1のバタウィ族とジャワ族、スンダ族、あるいは表2のサンギル・タラウッド出身者とミナハサ族間の結婚のように、お互いに出身地域も近く宗教も同じ種族の間で、種族外婚の起こる可能性が高い。また、地方出身者の男性が、ジャカルタで他種族の女性と結婚する場合、相手はジャワないしスンダ女性であることが多い。これは、働き者として名高いジャワ女性、あるいは美人として誉れの高いスンダ女性の魅力や、比較的アダット(adat 慣習, 伝統)規制のゆるやかなジャワないしスンダ文化の出身者への近付き易さであろう。しかし、より重要なのは、ジャカルタ内の種族別人口比率の影響であると考えられる。

表3は、オランダ植民地時代の統計・センサス、および1961年のセンサスをもとにして推計されたジャカルタの種族別人口構成である。いささか古いデータではあるが、種族間の相対的ランキングは、今とあまり変わっていないと思われる。この25年間の主な変化は、人口流入によるジャカルタのさらなる都

市化ともなうパタウィ族の比率の減少と、ジャワ、スンダ、および外島出身者の比率の増大であろう。

いずれにしても、表3から、ジャワ、スンダがジャカルタ人口の大半を占めていることがわかる。とくに、出身地が遠隔地の場合、女性だけがジャカルタへ出稼ぎに来ることは珍しく、ジャカルタ女性人口の種別構成は、ジャカルタに近接・隣接したジャワおよびスンダ地方出身者に、より比重の偏ったものであることが想定できる。したがって統計的に、地方出身男性がジャカルタで他種族の人と結婚する場合、その相手はジャワないしスンダの女性である確率が高いことになる。

上のような結論は、一体どの程度まで一般化できるのか。移住民の間であっても、ジャカルタ滞在の期間が長くなるにつれ種族外婚の率が高くなるのか。どのような人々が、種族外婚を行なう傾向にあるのか。このような疑問に対する答えは、ブギスのケースにみられるように、当然種族によっても様々であろう。以下では視野をより限定し、私が1980年から1981年にかけて行なった、ジャカルタ在住ミナンカバウ移住民の事例を考察する。表1、表2の接近法と異なり、私の調査の場合は、移住・出稼ぎ先のジャカルタでサンプルを絞るのではなく、移住・出稼ぎ人の出身村によってサンプルを絞ることにした。出身村の性格を理解することにより、サンプルの特徴やサンプルからの一般化の限界をよりの確に把握できると考えたからである。

以下では、西スマトラのシルンカン (Silungkang) 村出身者の事例を中心に、種族をめぐる婚姻形態を考えることとする。

II シルンカン村と地理的移動

シルンカン村は、ミナンカバウ族の故地である西スマトラ州のうち、彼らの文化的中核地帯とされる内陸高地に位置している。⁶⁾ ミナンカバウの伝承や諺にもよく名前が出てくる村で、西スマトラの村々のなかでも歴史が古いとされている。

村はシンカラ (Singkarak) 湖からクワンタン (Kuantan) 川へと続く水系の支流に面し、ラシ (Lasi) 川を挟むようにして両川岸に集落が広がっている。シルンカンには谷間の地にあり、そのため谷地を除いて水田はほとんど存在しない。田畑、居住地、森林をあわせた村の総面積は 3580 ha であるが、そのうち耕作地は 13%にも満たず、とくに水田は耕作地の 25% (111ha) を占めるにすぎない。もともとは傾斜地に集落を営み、そこに畑やコーヒー園をつくるとともに、谷地では水田を耕して生活していたようである。19世紀末に、村の比較的近くにオンピリン (Ombilin) 炭鉱が開かれ、それにともなって炭鉱と西スマトラの州都パダン (Padang) を繋ぐ鉄道が敷設された。鉄道はシルンカンの谷地を通過し、シルンカン自身にも停車駅が設けられるにいたった。さらに今世紀初頭になると、鉄道に平行するようにして、自動車道が建設されている。こうした変化は、シルンカンの人をして、農業にかわる商業への道に活路を見出させる刺激となった。

交通網の開通に対するシルンカン人の積極的な対応の背景には、農業に適さない劣悪な地理的環境もさることながら、織物という家内工業の存在も重要であった。シルンカンにおける織物業が、いつ頃から始まるものなのかは明らかでない。1830年代のオランダの記録として、当時輸入木綿糸が西スマトラ内陸部で織り糸用に紡がれ、その製品がシルンカンにも送られていたことが記されている [Oki 1979:148]。

村の年寄りに聞いた話では、昔は女性が布を織り、男性が製品を行商して歩いていたという。いずれにしても、道路、鉄道をとおして外の世界と繋がることにより、その後シルンカンの織物業が飛躍的に発展し、さらには男性の行商距離・行商頻度が増大したようである。

上の叙述からわかるように、19世紀後半以降、そしてあるいはそれ以前から、シルンカンには男性による行商・出稼ぎの伝統があり、それは形を変えながらも現在にまで伝わっている。インドネシアの独立後、とくに1960年代以降は、シルンカン人の家族による、ジャカルタへの地理的移動が盛んとなった。

村の人口について述べると、1961年、1970年、1980年のセンサスの結果は、

それぞれ 7478, 7848, 8861 であった。1961 年から 1980 年までの 20 年間に、この村の人口は 19 % 増えたことになる。同じ期間のインドネシア、スマトラ、西スマトラの人口増加をみると、それぞれ 52 %, 78 %, 47 % で、シルンカンより人口増加率ははるかに高い。シルンカンの低い人口増加率は、出稼ぎ・移住などの人口流出によって引き起こされたものである。シルンカン人のジャカルタへの地理的移動であるが、ジャワへの出稼ぎがミナンカバウ族の間でまだまれであった時代の 1912 年に、早くもシルンカン商人の、蘭領東インド総督府バタビア (Batavia) への進出が認められる [Marzali 1973 : 101]。オランダ時代、ジャワに渡ったミナンカバウは、その大部分がオランダ高等教育を目的とした人々であり、こうした早い時期でのシルンカン商人のジャワ行は、出稼ぎ好きとして知られるミナンカバウ族の間にあっても、特筆すべき事柄である。この背景には、織物と行商の伝統が大きな役割を果たしていた。

まず、シルンカンの織物は、オンビリン炭鉱に勤務するオランダ人によって、ヨーロッパへの土産物としての価値を見出されることとなった。また、布地を行商するところから、シルンカン商人はバティック (batik ジャワ更紗) の売買にも従事するようになった。こうしたことから、オランダ植民地行政の中心地であるバタビア、あるいはバティックの産地であるジャワへの関心が、早い時期から、シルンカン商人の間に芽生えた。

シルンカン人をジャワへとひきつけたもう一つの要因は、1927年にシルンカンで起こった共産党蜂起である。⁷⁾ この蜂起になんらかの形で関与した人々の多くは、オランダのその後の取締りの手を逃れ、遠くの地、たとえばジャワへと渡って行った。また、蜂起参加者の何人かは、逮捕されるとジャワに流されており、自分の親族・同郷人が流された島ということで、ジャワに興味をひかれた人々もいたと聞く。

早い時期でのシルンカン人のジャカルタ進出にもかかわらず、この都市が、シルンカン人の地理的移動における最大の求心地となるのは、他のミナンカバウ族の場合と同じように、インドネシアの独立後、それも 1960 年代以降の話である。

ジャカルタに、現在何人くらいの数のシルンカン人が住んでいるかであるが、1970年に、ジャカルタ在住シルンカン人の同郷会組織 PKS (Persatuan Keluarga Silungkang シルンカン家族会) が、在ジャカルタ・シルンカン出身者にかんするセンサスを行なっている。ジャカルタは広大であり、かつまた人の出入りも激しいため、限られた費用と労力のもとで、必ずしも総ての在ジャカルタ・シルンカン家族を網羅できたわけではない。しかし、推定 80% の家族はカバーできたとされている。この調査に基づく在ジャカルタ・シルンカン人の推計値は 315 世帯、2317 人であった [ibid. : 115-116]。

私自身も、1981年に PKS と IMPPS (Ikatan Mahasiswa Pemuda Pelajar Silungkang シルンカン青年・学生連合) の協力により、同じようなセンサスを試みた。その結果によると、ジャカルタ在住シルンカン人の総数は、推計 557 世帯、3646 人であった。1970年から1981年にかけて、ジャカルタのシルンカン人口は 57% 増加したことになる。ちなみに、シルンカン村の人口自体は、同じ期間に 13% しか増えていない。1981年に、丁度ジャカルタに出て来ていたシルンカン村の村長と、私はたまたま話す機会があった。村長の話によると、当時移住・出稼ぎに出ていたシルンカン出身者のうち、90% 近くがジャカルタで生活しているだろうとのことであった。

婚姻形態についていうと、母系制のミナンカバウ社会では、同村内婚と母系氏族外婚の規制が、慣習法上の一般的な決りである。幾つかの調査結果をみても、実際に同村内婚への志向が強い [Kato 1982: 230 ; Naim 1979:195; Thomas 1977:104-106]。こうしたなかでも、シルンカンは、とくに同村内婚志向が強いことで有名である。1970年代初頭までは、同村内婚を守らない者には、村八分のような制裁さえ加えられた。たとえば、「よそ者」と結婚したシルンカンの女性は、村でそのまま生活をすることが許されず、村を出なければならなかった。

同村内婚志向は、村でみられるばかりでなく、ジャカルタに住むシルンカン人の間でも根強い。1970年のセンサス実施の際も、センサスの対象となる「シルンカン人」(orang Silungkang) とは、両親ともにシルンカン出身者で、さら

に自分自身結婚している場合には、結婚相手もシルンカン人である者、と定義されている [Marzali 1973:3-4]。センサス終了後のデータ・チェックにおいて、「よそ者」と結婚している人が何人か発見されたが、その数はわずかに14、男が13人、女が1人だけであった [ibid.: 115]。⁸⁾

同村内婚規制がジャカルタや他の出稼ぎ地でも守られている例は、なにもシルンカンだけに限られない。シルンカン以外の幾つかの村の出身者についても、同じような傾向のあることが報告されている [加藤 1983 : 56; Naim 1979 : 195; Persoon 1982 : 141]。ただし、シルンカンはこうした傾向が際立って強い村である、とはいえそうである。

シルンカン村の特徴をまとめると、出稼ぎの歴史が古く、また数の上でも村をあとにして村外で働いている人が多い。現在の移住・出稼ぎ先は、主としてジャカルタで、職業は商人である。昔から商業志向が強いため、従来、教育への関心は薄かった。シルンカン人の親が子供の高等教育にも力を入れたのは、今から10年ほど前からのことである。結婚形態については、少なくとも1970年頃までは、村においても出稼ぎ地においても、村内婚の順守が標榜されていた。

1970年以来、シルンカン人の同村内婚志向には、かなりの変化がみられるようになった。この点について、私がジャカルタで行なった調査をもとに検討してみよう。

Ⅲ 在ジャカルタ・シルンカン出身者の婚姻形態

私が1981年に実施した在ジャカルタ・シルンカン出身者のセンサスにおいては、世帯主と伴侶、そして子供達に関する人口学的情報だけではなく、存命中の既婚の子供達の婚姻形態についても質問した。さらに、世帯主の存命中の兄弟・姉妹に関しても、彼らの婚姻形態について尋ねた。子供、兄弟・姉妹ともに、彼らの現在の居住地をジャカルタに限定せず、シルンカン在住あるいはインドネシア他地域の在住者をも網羅するよう努めた。

表4 シルンカン出身者の婚姻形態

学式の年 学式地	1946年 以前	1946— 1950	1951— 1955	1956— 1960	1961— 1965	1966— 1970	1971— 1975	1976— 1981	合 計
シルンカン	0 (0) 157	1 (0) 79	0 (0) 74	0 (1) 120	0 (1) 115	0 (0) 117	0 (1) 86	1 (3) 80	2 (6) 828
西スマトラ 他地域	0 (3) 3	0 (1) 2	0 (1) 1	0 (3) 3	0 (2) 5	0 (1) 1	0 (2) 4	1 (4) 6	1 (17) 25
ジャカルタ	0 (0) 2	1 (0) 1	3 (1) 6	4 (0) 19	6 (2) 64	17 (5) 76	26 (8) 142	53(23) 216	110(39) 526
インドネシア 他地域	1 (0) 1	3 (0) 5	1 (0) 1	1 (0) 5	0 (0) 13	8 (0) 22	5 (0) 12	10 (1) 25	29 (1) 84
合 計	1 (3) 163	5 (1) 87	4 (2) 82	5 (4) 147	6 (5) 197	25 (6) 216	31(11) 244	65(31) 327	142(63) 1463

親子あるいは兄弟・姉妹が同じジャカルタに滞在し、なおかつ各自世帯主である場合には、同一の名前が重複して言及される可能性がある。こうした可能性を除去するため、データ処理においては、集計した総ての名前をワードプロセッサに打込み、ABC順に並びかえるとともに、名前、年齢、学歴、職業を点検しつつ、重複言及された名前を消去するといった、きわめて込み入った手続をとることとなった。以下に述べるのは、こうして整理されたセンサス・データのうち、とくにシルンカン出身者の婚姻形態に関するものである。

集計に含まれた対象は、世帯主と現在の伴侶、世帯主の存命中の既婚の子供とその伴侶、世帯主の存命中の既婚の兄弟・姉妹とその伴侶である。死別、離別、一夫多妻婚などによって、1回以上結婚したことのある人については、現在の伴侶ないし最も最近まで一緒だった伴侶との結婚に関して尋ねた。なお、現在実際に一夫多妻婚の人は5人にも満たず、それも妻の数はふたりである。彼らの結婚は、それぞれ独立の結婚として計算した。

表4は、結婚式の西暦年および結婚式の場所によって、シルンカン出身者の間における結婚形態を数え上げたものである。表の桁目の数字のうち、横線の上の左側の数字は種族外婚の数を、右の括弧内の数字は種族内婚ではあるがシルンカン出身者以外のミナンカバウ人との結婚の数を、そして横線の下側の数字は、各桁目ごとの結婚総数を示したものである。この表から、次のようなことがわかる。なお、以下では、「村外婚」という言葉でシルンカン以外のミナン

カバウ人との結婚を、「種族外婚」という言葉でミナンカバウ以外の種族との結婚を指すこととする。

(1) アダットにより、村外婚ひいては種族外婚が禁止されていたにもかかわらず、村外婚や種族外婚はオランダ時代から存在していた。しかし、1965年までは、それも、とくに第二次世界大戦終結までは、村外婚・種族外婚が起こることはきわめてまれであった。

(2) 1956年以来、シルンカン村の外で結婚式を挙げるカップルが増えており、1971年からは、村の外で結婚式を挙げる人の数が、村で結婚式を挙げる人の数を上回るようにさえなっている。

(3) 村外での結婚式の増加が先行し、やがて1966年から、村外婚・種族外婚の数が増え始めている。また、各時期をつうじて、村で挙げられた結婚式のほとんど総てが、シルンカン出身者同士の結婚である。したがって、結婚式を村内あるいは村外で行なうかは、単にどこで結婚式を挙げるかの場所の問題にとどまらず、シルンカン人、なかでも移住・出稼ぎシルンカン人の価値観や、生活志向の変化を反映していると思われる。

(4) 村外婚も増加傾向にあるが、シルンカン出身者が「よそ者」と結婚する場合、結婚相手は同族のミナンカバウ人よりは、他種族出身者である可能性のほうが高い。

(5) 村外での結婚式の増加、村外婚・種族外婚の増加は、とくにジャカルタにおいて顕著である。

表4の結果のうち、村外婚者・種族外婚者の数を、シルンカン出身者の性別によって分類したものが表5である。⁹⁾ 表中、挙式地の《西スマトラ》には、シルンカン村での挙式も含めた。柁目内の数字は、左の数字が種族外婚者の数を、括弧内の数字が村外婚者の数を示す。*印は、当該期間中に結婚した者がいなかったことを意味している。また、表の左側の性別は、シルンカン出身の種族外婚者の性別を示す。《ジャカルタ》および《インドネシア他地域》の両方において、この20年間、男女ともに村外婚者・種族外婚者の数が増加傾向にあることがわかる。とくにジャカルタにおける女性のそれは、この数年増加が著しい。

表5 シルンカン出身者にみる種族外婚の事例

学式の年 学式地	1946年 以前	1946— 1950	1951— 1955	1956— 1960	1961— 1965	1966— 1970	1971— 1975	1976— 1981	合 計
	西スマトラ								
男	0 (3)	1 (0)	0 (0)	0 (3)	0 (3)	0 (1)	0 (1)	1 (5)	2(16)
女	0 (0)	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	1 (2)	1 (7)
ジャカルタ									
男	0 (0)	1 (0)	2 (1)	4 (0)	4 (1)	9 (2)	15 (1)	21(10)	56(15)
女	0 (0)	* *	1 (0)	0 (0)	2 (1)	8 (3)	11 (7)	32(13)	54(24)
インドネシア 他地域									
男	1 (0)	3 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	6 (0)	2 (0)	4 (0)	18 (0)
女	* *	0 (0)	* *	0 (0)	0 (0)	2 (0)	3 (0)	6 (1)	11 (1)
合 計									
男	1 (3)	5 (0)	3 (1)	5 (3)	4 (4)	15 (3)	17 (2)	26(15)	76(31)
女	0 (0)	0 (1)	1 (1)	0 (1)	2 (1)	10 (3)	14 (9)	39(16)	66(32)

表6 シルンカン出身者にみる種族外婚における伴侶の出身地

	伴 侶 の 出 身 地						合 計
	ジャ カ タ	西ジャワ	中・東 ジャワ	スマトラ	インド ネシア 他地域	そ の 他	
シルンカン 出身者の性別							
男	17(22%)	26(34%)	18(24%)	9(12%)	2 (3%)	4 (5%)	76(100%)
女	14(21%)	9(14%)	25(37%)	9(14%)	9(14%)	0 —	66(100%)
合 計	31(22%)	35(24%)	43(30%)	18(13%)	11 (8%)	4 (3%)	142(100%)

種族外婚における結婚相手の出身地に関しては、ジャワ島出身者が圧倒的に多い(表6)。種族外婚者の性別による主な違いは、シルンカン出身者が男である場合、西ジャワ出身の女性(おそらく多くはスダグ女性と思われる)と結婚している人が多く、また少数ではあるが、中国系インドネシア人(3人)やマレーシア人(1人)と結婚している人がいるのも目立つ(後2者のケースは、表6では《その他》に含まれている)。シルンカン女性の種族外婚者については、ジャワ男性との結婚が比較的多く、また南スラウェシやカリマンタン出身者との結婚も幾つかみられる(後2者は、表6では《インドネシア他地域》に含まれている)。なお、表6における《ジャカルタ》であるが、果してこれがバタウィ族を指すのか、あるいは他の種族ないし異種族間結婚の子供でジャカルタ生まれの人を

表7 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（職業）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ 他 地 域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の職業						
商 業	472 (85%)	11 (46%)	10 (91%)	21 (64%)	11 (61%)	525
職人業・手仕事	27 (5%)	4 (17%)	1 (9%)	4 (12%)	4 (22%)	40
事務職	50 (9%)	9 (37%)	0 —	7 (21%)	3 (17%)	69
主婦業	0 —	0 —	0 —	0 —	0 —	0
その他	6 (1%)	0 —	0 —	1 (3%)	0 —	7
合 計	555(100%)	24(100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	641
シルンカン女性の職業						
商 業	27 (11%)	3 (10%)	2 (14%)	2 (8%)	0 —	34
職人業・手仕事	13 (5%)	1 (4%)	1 (7%)	0 —	2 (8%)	17
事務職	4 (2%)	4 (14%)	0 —	0 —	2 (8%)	10
主婦業	197 (81%)	21 (72%)	11 (79%)	22 (88%)	21 (84%)	272
その他	2 (1%)	0 —	0 —	1 (4%)	0 —	3
合 計	243(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	25(100%)	336

表8 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（教育程度）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ 他 地 域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の教育程度						
小学校	86 (16%)	3(12.5%)	1 (9%)	3 (9%)	3 (17%)	96
中学校	218 (39%)	9(37.5%)	5 (46%)	12 (37%)	7 (39%)	251
高等学校	169 (30%)	6 (25%)	1 (9%)	11 (33%)	4 (22%)	191
大学・大学院	83 (15%)	6 (25%)	4 (36%)	7 (21%)	4 (22%)	104
合 計	556(100%)	24 (100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	642
シルンカン女性の教育程度						
小学校	75 (31%)	0 —	3 (21%)	5 (20%)	2 (8%)	85
中学校	114 (47%)	8 (28%)	6 (43%)	8 (32%)	10 (38%)	146
高等学校	46 (19%)	12 (41%)	4 (29%)	10 (40%)	7 (27%)	79
大学・大学院	8 (3%)	9 (31%)	1 (7%)	2 (8%)	7 (27%)	27
合 計	243(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	26(100%)	337

表9 シルンカン出身の種族外婚者の特徴（出生地）

	伴 侶 の 出 身 地					合 計
	シルンカン	西スマトラ他地域	ジャカルタ	ジャワ島	そ の 他	
シルンカン男性の出生地						
シルンカン	506 (91%)	16 (67%)	9 (82%)	25 (76%)	13 (72%)	569
西スマトラ他地域	5 (1%)	7 (29%)	1 (9%)	1 (3%)	1 (6%)	15
ジャカルタ	12 (2%)	1 (4%)	1 (9%)	2 (6%)	2 (11%)	18
ジャワ島他地域	24 (4%)	0 —	0 —	5 (15%)	2 (11%)	31
その他	9 (2%)	0 —	0 —	0 —	0 —	9
合 計	556(100%)	24(100%)	11(100%)	33(100%)	18(100%)	642
シルンカン女性の出生地						
シルンカン	202 (84%)	12 (42%)	7 (50%)	9 (36%)	10 (38%)	240
西スマトラ他地域	7 (3%)	7 (24%)	2 (14%)	2 (8%)	5 (19%)	23
ジャカルタ	10 (4%)	5 (17%)	5 (36%)	5 (20%)	8 (31%)	33
ジャワ島他地域	11(4.5%)	3 (10%)	0 —	9 (36%)	2 (8%)	25
その他	11(4.5%)	2 (7%)	0 —	0 —	1 (4%)	14
合 計	241(100%)	29(100%)	14(100%)	25(100%)	26(100%)	335

表10 シルンカン出身者の出生地に関する年齢的推移

	シルンカン出身者の 1981 年時の年齢				
	40—49歳	30—39歳	20—29歳	10—19歳	0—9歳
男性の出生地					
シルンカン	221 (93%)	345 (92%)	274 (67%)	154 (32%)	49 (12%)
西スマトラ他地域	2 (1%)	10 (3%)	7 (2%)	25 (5%)	6 (1%)
ジャカルタ	3 (1%)	1 (0%)	80 (19%)	260 (55%)	359 (84%)
ジャワ島他地域	11 (5%)	16 (4%)	28 (7%)	20 (4%)	10 (2%)
その他	1 (0%)	4 (1%)	19 (5%)	20 (4%)	3 (1%)
合 計	238(100%)	376(100%)	408(100%)	479(100%)	427(100%)
女性の出生地					
シルンカン	93 (91%)	147(81.5%)	149 (55%)	153 (33%)	57 (14%)
西スマトラ他地域	1 (1%)	12 (6.5%)	16 (6%)	20(4.5%)	6 (1%)
ジャカルタ	2 (2%)	3 (1.5%)	78 (28%)	249 (54%)	339 (82%)
ジャワ島他地域	4 (4%)	14 (7.5%)	13 (5%)	17 (4%)	10 (2%)
その他	2 (2%)	4 (3%)	16 (6%)	20(4.5%)	4 (1%)
合 計	102(100%)	180 (100%)	272(100%)	459(100%)	416(100%)

指すのかは、確定し難い。おそらく、多くは前者であろう。

村外婚者・種族外婚者の特徴であるが、ここでは表7から表9に掲げてあるように、シルンカン出身者の性別によって、彼らの職業、教育程度、出生地についてみてみた。なお、村外婚・種族外婚ともに1960年以降増えていること、そしてシルンカン出身者の職業・教育程度・出生地は、1960年頃を境として大きく変化している可能性があることを鑑み、表7から表9の結果は、1961年から1981年までの間の全種族外婚（ジャカルタでの挙式に限定せず）について集計したものである。表中、シルンカン出身者同士の結婚件数が、女性よりも男性に多いのは（たとえば表7では、女性243に対して男性555）、結婚は夫婦のどちらか片一方のみについて記録されたものであり、シルンカン出身者同士の結婚は、データ集計時に、そのほとんどが男性側に記録されたことによる。この意味で、同村内婚のシルンカン女性の特徴は、男性のそれに比べると代表性に劣るといえる。また、表の間で事例の総数に違いがあるのは、各項目ごとに、データ不在の事例を除外して集計しているからである。

表7、表8、表9の結果から、次のようなことがいえる。¹⁰⁾

(1) 村内婚者に比べ、村外婚・種族外婚の男性は、“ジャカルタ女性”と結婚した者を除き、《商業》の割合が低く、《事務職》の割合が高い（表7）。女性については目立った違いは無いが、これは、ほとんどが《主婦業》であるため、結婚前の女性の職業を尋ねていたら、あるいは結果は違っていたかもしれない。

(2) 教育程度については、村内婚と村外婚・種族外婚の男性の間に、際立った相違はない（表8）。しかし女性の場合は、前者に比べ、後者の教育程度が高い。

(3) 村内婚者に比べ、村外婚者・種族外婚者には、シルンカンでではなく他郷で生まれた人が多い（表9）。これは、とくに、女性の村外婚者・種族外婚者の間に顕著である。《西スマトラ他地域》、《ジャカルタ》、《ジャワ島他地域》で生まれた女性の場合には、半分以上がシルンカン出身者以外の男性と結婚している（表の横欄をとおしてみよ）。他郷生まれのシルンカン人は、親がすでに一

家揃って村の外で生活しており、その結果親の仕事先で生まれた人々である。こうした人達は、かつて時には、教育のため親の出身村の祖父母などのもとに預けられたりしたこともあった。また、なかには、後になんらかの事情で親子揃って帰村し村で生活するようになった人々もいるであろう。しかし1961年以降についていえば、こうした人達は、おおむねそのまま村の外で育った可能性が強い。他郷で生まれた人は、シルンカン外での暮しの長い人とみて、まず間違いない。

他郷での出生と村外婚・種族外婚との結び付きは、今後のシルンカン出身者の婚姻形態を考えると、きわめて重要である。表10は、センサスにおいて拾うことのできたシルンカン出身者のうち、50歳以下の人の出生地を集計したものである。ジャカルタ在住の世帯主を起点として、彼らの存命中の子供、兄弟・姉妹（ジャカルタ在住とは限定せず）を列挙した結果である。¹¹⁾ジャカルタが起点であるだけに、一般的に世帯主の子供が含まれる0歳から19歳までの年齢では、ジャカルタ生まれの割合が多くなるであろうことは予想できる。それにしても、表10は、単に実数をみただけでも、ジャカルタ生まれのシルンカン人が1961年以来急激に増加したことを示している。

表9にみたような結果が今後とも観察されるとするならば、他郷出生者、とりわけジャカルタ出生者の増加は、シルンカン出身者の間に、将来にわたって種族外婚の数が増えるであろうことを示唆している。

おわりに

異種族間の結婚は、インドネシアでも、たとえばジャワの北海岸地帯やリアウの島嶼部のように、昔から多種族の往来の激しかった地域では、オランダ時代以前から、比較的頻繁に起こったであろうと想像される。しかし、このような結婚が「雑婚」(kawin campur)として概念化され、それも一種の「社会的問題」としてインドネシア人の意識にのぼるようになるのは、20世紀の初頭、蘭領東インドの領域支配が最終的に確立し、人々の間に「蘭領植民地現住民」

という共通の準拠枠が形成されてくるとともに、各地域間、すなわち各種族間の交通・往来が頻繁化してきた時代以降のことであると思われる。

この時代の異種族間結婚に対する認識枠の形は、1920年代から1930年代にかけて、主としてミナンカバウ出身の作家によって書かれた小説によくあらわれている。これらの小説の中では、その典型的な形において、異種族間結婚は社会の進歩的な人々、たとえば他郷生活の経験のある知識人や商人が、恋愛などをとおして内発的に志向する選択であり、自己の伝統の相対化の手段でもある。異種族間結婚が、多くの場合、結局は伝統の力に抗し切れず最終的には悲劇に終わっているのも、これらの小説に特徴的である（より詳しくは Teeuw [1967: 57-63, 69-72] を参照）。

これと異なる異種族間結婚のモチーフ化が、私が1981年、ジャカルタでの調査時に買い求めた二つのカセットテープにみられる。これは、この10年ほど伸びの目覚ましいカセットテープ市場のためにジャカルタで制作・録音されたドラマで、『分れ道にて』(*Disimpang Duo*)と『スンダ女性を妻として』(*Marboru Sunda*)という題のものである。¹²⁾前者は2巻テープで、ミナンカバウ男性とジャワ女性の結婚を、後者は1巻もので、バタック男性とスンダ女性との結婚に関する物語である。ジャワやスンダに比べれば、ミナンカバウもバタックも、ジャカルタ人口中あるいはインドネシア人口中の比率は少ない。しかし、人口サイズの順番でいけば、インドネシアで5、6番目に大きな種族で、ジャカルタでも、政治・経済・教育などにおいて影響力のある種族と他とともに認め・認められており、なおかつアダットの強いことでも知られている。種族的自意識・自負心が強く、「重みのある少数種族」とでも呼ぶべきこの二つの種族が、インドネシア人口・ジャカルタ人口の多数派であるジャワの女性・スンダの女性との結婚を、揃って扱っているところが面白い。テープは、ジャカルタ在住のミナンカバウおよびバタックの芸能グループにより演出・制作されたもので、それぞれの土地の言葉で語られる物語は、明らかにジャカルタ在住のミナンカバウ人、バタック人を市場対象として作られたものである。

物語の筋は、概略つぎのとおりである。マスパール(Maspar)、オジャ(Ojak)

という、それぞれミナンカバウとバタックの青年が、親の期待を一身に受け勉学のためジャカルタへと発つ。マスパールは、初期の目的を達成してインシニョール (Ir. 理工系の修士) となるが、オジャの場合は、都会の誘惑に負け勉学がおろそかになってしまう。いずれの場合も、大学での友達であるジャワ女性やスダ女性と恋に落ち、親の許しも得ずにジャカルタで結婚し、オジャには子供までできてしまう。やがて、妻あるいは妻子を親に引きあわせるため故郷に帰るが、結婚という既成事実をめぐる、親子、親戚の間にドラマが展開される。その過程で、アダットをめぐる議論も繰り広げられるが、この部分は、アダットの知識に乏しい都会の若者たちに対して、一種のアダットを教え諭す場ともなっている。結末は、マスパールもオジャも、アダットを無視した自分たちの非、すなわちアダットによるところの最も相応しい結婚相手 (たとえばオジの娘) との結婚を避け、異種族の女性と、それも親の許可なくして結婚したことの非を謝罪することにより、彼らの結婚も認められ、祝福されるというものである。

オランダ時代の小説であったならば、マスパール、オジャともに、妻 (子) を親に引きあわせるような状況は起こらなかったであろうし、また、彼らの結婚が認められ、祝福されるようなこともなかったであろう。イトコ婚や種族内婚といった、アダットに則って相応しいとされる婚姻形態を依然として理念として掲げながらも、種族外婚が社会的にも許容されるにいたったことを、カセットテープの物語は反映している。

表1、表2の結果をみる限り、ジャカルタに住むカップルの多くが、種族内婚によって結ばれた夫婦であるという印象を受ける。この印象は、ジャカルタ全体に当てはめてみても、おそらく大方において正しいであろう。しかし、一方、西スマトラ・シルンカン村出身者の事例は、1971年頃から、ジャカルタにおける婚姻形態にも徐々に変化のあることを示している。シルンカン村は、種族内婚志向の高いミナンカバウ社会でも、とくに村内婚規制の強い村として有名であり、この村の出身者にみる婚姻形態の変化の兆しは、上のカセットテープの物語と同様に示唆的である。

シルンカン出身者の変化の徴候は、1961年頃からみられる。一つは、ジャカルタで結婚式を挙げる人が増え始めたこと(表4)、そしてもう一つは、おそらく一部その結果として、ジャカルタ出生者の数が増加し始めたことである(表10)。両方の傾向ともに、ジャカルタへ移住・出稼ぎするシルンカン出身者の生活基盤が、村を離れてジャカルタへと移っていることを示している。

種族外婚の件数は、1966年頃から増え始め、それも年を追うごとに増加している(表4、表5)。シルンカン出身者の事例でいえば、1976—1981年の間にジャカルタで挙げられた結婚のうち、25%が種族外婚、11%が村外婚(シルンカン出身者以外のミナンカバウ人との結婚)である(表6)。

他種族出身者と結婚した人は、他郷で生まれたシルンカン出身者に多く(表9)、他郷での生活経験の長さが、種族外婚と関係していることを示唆している。この結果は上の生活基盤の所在と、密接に関連していることはいうまでもない。

高い教育程度や事務職といった職業も、種族外婚と相関していると思われるが、シルンカン出身者には、高等教育を受けた人や事務職の人がまだ少なく、相関の程度はあまり明らかではない(表7、表8)。

将来の見通しとしては、種族内婚、なかんづく村内婚が、依然として理想として掲げられ、なおかつ統計的モードとして残るであろう。若い世代のなかには、旧式であるとして、意識的に村内婚に反発する人達もいることはいる。しかし、私のジャカルタでの経験では、あとうならば、親の世代にあっても子供の世代にあっても、シルンカン出身者同士の結婚が望ましい、と考えている人が大多数である。前出のシルンカン同郷会の青年部会であるIMPPSが、ピクニックやスポーツ大会などを催し、ジャカルタ在住の年頃のシルンカン青年男女が、お互いに出会い、知りあう機会を作り出すよう努力しているのも、村内婚の理想があるからにはほかならない。

しかしながら、一方で、ジャカルタ生まれのシルンカン人が増えていること(表10)、また、ジャカルタ在住シルンカン子弟の教育も将来高度化されるだろうこと、などを考えると、同村出身以外の要素が、伴侶選定の際の重要な基

準となってくるであろう。それは、たとえば、教育程度、出身階層、生活様式などが、お互いに釣り合っていることかもしれない。若い世代にみられる恋愛結婚志向も、シルンカン出身者の婚姻形態をますます多様なものとするに違いない。

今後は、とくに、表5にその徴候がみられるように、女性の種族外婚が、男性のそれより早いペースで増加すると私は考えている。ジャカルタに生まれ育ち、教育も仮に高いとしても、シルンカン男性には、ジャカルタ在住のシルンカン女性だけではなく、村で生まれ育った同郷女性も、将来の伴侶の候補者となりうる。イスラーム教徒にとって最大の聖祭である断食明けのお祭りには、たくさんのお嫁ぎ人がシルンカン村へと帰って来る。そして、お祭りの済んだ後一週間ほどは、お嫁ぎ先から一時帰郷した若者と村娘との結婚式が続く。しかし、こうした選択は、都会生まれのシルンカン女性には、まったくといってよいほど閉ざされている。ジャカルタ生まれで、ある程度までの学校に行った女性が、教育も低いに違いない田舎者と結婚することは、本人にとっても彼女らの親にとっても不本意であろう。これらの女性にとっては、村内婚の選択の幅が狭いだけに、種族外婚の可能性が増えざるをえない。

もう一つ、これまた女性にとってより深刻と思われるのが、ジャカルタやその他の都市での、死別・離別による再婚の問題である。たとえ初婚は村内婚であっても、他郷での再婚相手も同郷出身者である確率は、年齢コホートの結婚可能な男女数のバランスからいっても少ないに違いない。

いずれにしても、種族外婚の数が増えるにしたがい、ジャカルタで私が何度か聞かされたように、種族的背景や同村出身といった考慮よりは、現在は当然のこととされている同じイスラーム教徒という配慮が、あるいは、いずれ、最小公約数として中心的な判断基準となるのかもしれない。

種族外婚の増加による通婚圏の拡大は、村内婚→村外婚(種族内婚)→種族外婚といった、単線的な移行経過をたどるのではない。本稿の初めに述べたごとく、都市における種族内婚といえども、結婚相手の選定は、決して無作為になされてはいない。シルンカンに代表されるミナンカバウの例でいえば、ジャ

カルタでの種族内婚は、出身村という枠組みのなかでの婚姻であり、都市でのこの枠組みの重要性の相対的低下は、他のミナンカバウ人との結婚とは結び付かず、むしろ表4の示すように、他種族との結婚により強く結び付いている。したがって、都市における婚姻形態の研究にあっては、たんに種族内婚、種族外婚の対比だけではなく、都市での種族内婚を内側から支える人間関係のネットワーク、つまり都市のなかの「むら」の同定が緊要である。

ミナンカバウの場合は、都市のなかの「むら」は、文字通り出身村とそれを母体とする同郷会である（だからこそ、村内婚の減少は種族外婚の増加と結び付く）。しかし、種族によって、この「むら」の形はまちまちであろう。それは、トバ・バタックのように、キリスト教会に根差したものであるかもしれないし、サンギル・タラウッドのように、村落を越えたより広範な同一出身地域とジャカルタ内の特定居住区域に立脚したものであるかもしれない。

「むら」の形がまちまちであるということは、とりもなおさず、都市での「むら」の形成過程が異なるだけでなく、「むら」の変容過程も異なるであろうことを意味している。そして、それは当然のことながら、種族外婚への道も様々であろうことを示唆する。

本稿では、婚姻形態に関する社会階層的分析がなされなかったが、こうした分析とともに、将来は、ジャカルタないしインドネシア都市部における婚姻形態の、種族別の事例研究が待望される。

上記以外に、今後に残された研究課題の一つに、種族外婚における伴侶選定過程の問題がある。このような究明をつうじて、種族外婚増加の理由もより明確になろう。

いずれにしても、インドネシア都市部における婚姻形態の研究は、多民族国家インドネシアの国民統合を考えるうえでも、今後ますます重要となろう。

注

- 1) 東南アジア研究において、このような問題関心はまだ充分には展開されていない、わずかにシンガポールについて、幾つかの研究が存在する。シンガポールにおける異民族間の婚姻形態に関しては、Foon and MacDougal [1977], Kuo and Hassan [1979], Lee et al. [1974] を参照。
- 2) これらの研究の概観については、ESCAP [1981], Sethuraman [1976] を参照。
- 3) アシジャフィアヤの塾生に、どうして「ジャカルタ現住民」ともいえるバタウィ (Batawi) 族が多いのかは、調査のなかでは明らかにされていない。バタウィ族はイスラーム教育に力を入れるとは、昔からよくいわれている。
- 4) サンギル・タラウッド (Sangir Talud) は、実際は種族ではなく、二つの小島嶼群の名前である。しかし、この地域の出身者はジャカルタで一つの同郷会を形成していること、そしてジャカルタのサンギル・タラウッド社会を調査したスバルランが、この地域の出身者を一つのグループとして扱っていることなどから、ここではあたかも種族のようにして考えた。ただし、タンジュン・プリウック (Tanjung Priuk) では、タラウッドよりサンギル出身者が圧倒的多数である。ミナハサ (Minahasa) の種族内婚率は、タンジュン・プリウックにあるミナハサ同郷会の代表メンバー (メンバーは家族が単位で代表メンバーは世帯主) の構成から計算した。ブギス (Bugis) のサンプルには一夫多妻婚者が多数いるが、表2の数字は第一夫人の種族的背景に依拠している。ミナンカバウ (Minangkabau) に関するデータは、バンドン、ウジュン・バンドン、メダンからのものもあるが、その大部分はジャカルタからのものである。
- 5) 第三夫人までいる人の数は13人で、他は第二夫人までである [Roosmalawati 1979:107]。
- 6) 本稿のデータ源であるサーベイ調査は、1981年の7月から12月にかけて、ジャカルタにおいて実施された。この時の調査費については、アメリカの Social Science Research Council から、滞在費については、京都大学東南アジア研究センターから援助を受けた。さらに、1985年の1月と2月に、数日間ずつではあったが、シルンカン村とジャカルタにおいて補足調査を行なっている。この時の費用は文部省の科学研究費による。シルンカン村の昔の様子に関しては、主にジャカルタおよび村に住んでいる老人から聞き取り調査を行なった。
- 7) この蜂起に関するより詳しい内容は、Benda and McVey [1960] を参照。
- 8) これらの人々は、マルザリのデータ処理からは除外されている。なお、後出の表4が示すように、種族外婚者の数は、実際にはこれより多かった可能性がある。
- 9) シルンカン出身者同士の結婚は、男女両方に適用するわけで、表5では当該期間中の男女別結婚総数は示さなかった。
- 10) 表7の“職人業・手仕事”とは、主として織物業と縫製業を指す。表8の各教育程度には、1年以上通学した途中退学者 (《小学校》では3年間通学) も含まれている。
- 11) 50歳以上の年齢では、ほとんど総てがシルンカン生まれである。なお、表のなかで、29歳以上の年齢で男女数に大きな差があるのは、センサスにおける情報提供者が、主として男性だったことによる。
- 12) 『わかれ道にて』は、バレロン・グループ (Balerong Group) によって制作され、グローブ (Globe) から発売されている。『ソнда女性を妻として』は、グループ・バルポルン (Group Parpollung) によって制作され、ボーイング 747 (Boeing 747) から発売されている。両者とも、1980年末か1981年初頭に発売されたものと思われる。なお、後者のテープの粗筋を理解するには、タンバ氏 (J. L. Tamba) の協力を得た。

参考文献

- Amali, Jurhan. 1970. *Masjarakat Gorontalo di Tanjung Priok Jakarta*. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Benda, Harry J.; and McVey, Ruth T. 1960. *The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia: Key Documents*. Ithaca, N. Y.: Cornell Modern Indonesia Project.
- Bogardus, E. S. 1925. Measuring Social Distances. *Journal of Applied Sociology* 9: 299-308.

- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profile of Djakarta. *Indonesia* 3(April): 153-204.
- ESCAP. 1981. *Migration, Urbanization and Development in Indonesia*. New York: United Nations.
- Foon, Chew Sock; and MacDougal, John A. 1977. *Forever Plural: The Perception and Practice of Inter-Communal Marriage in Singapore*. Papers in International Studies Southeast Asia Series No. 45. Athens, Ohio University: Southeast Asia Program, Ohio University.
- Geertz, Hildred. 1967. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by Ruth T. McVey. New Haven: Human Relations Area Files.
- Jusuf, Sulaiman. 1973. Perguruan Asysyafi'iyah di Jakarta Selatan: Suatu Studi Perbandingan mengenai Nilai Nilai dan Norma Norma dari Santri Yang Bermukim dengan Yang Tidak Bermukim. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Kato, Tsuyoshi. 1982. *Matriliney and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- 加藤 剛. 1983. 「都市と移住民: ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』21 (1): 47-61.
- Kuo, Eddie C. Y.; and Hassan, Riaz. 1979. Ethnic Inter-marriage in a Multiethnic Society. In *The Contemporary Family in Singapore*, edited by Eddie C. Y. Kuo and Ailine K. Wong. Singapore: Singapore University Press.
- Lee, Che-Fu; Potvin, Raymod H.; and Verdieck, Mary J. 1974. Interethnic Marriage as an Index of Assimilation: The Case of Singapore. *Social Forces* 53(1): 112-119.
- Lobarnebal, Sudja'i Zak. 1973. Pedagang Sate Madura di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Marzali, Amri. 1973. Orang Silungkang di Jakarta: Latar Belakang dan Fungsi Konflik dalam Sistem Kekerabatan Mereka. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra dan Kebudayaan, Universitas Gajah Mada.
- Mertens, Walter. 1976. Jakarta, A Country in a City: A Demographic Introduction to Jakarta. *Majalah Demografi Indonesia* 3(6): 50-109.
- Naim, Mochtar. 1979. *Merantau: Pola Migrasi Suku Minangkabau*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Oki, Akira. 1979. A Note on the History of the Textile Industry in West Sumatra. In *Between People and Statistics: Essays on Modern Indonesian History*, edited by Francien van Anrooij et al. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Pandjaitan, Nurmala Kartini. 1977. Kegiatan Dagang Inang-Inang: Kedudukan dan Perannya dalam Keluarga dan Masyarakat Batak Toba di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Persoon, Gerard. 1982. *Wij met Elkaar: De Minangkabau in Jakarta*. Leiden: Instituut voor Culturele Antropologie en Sociologie der Niet-Westerse Volken.
- Rahardjo, Julfita; and Papanek, Hanna. 1980. Pemilihan Sample, Cara Mewawancara dan Ciri Khas Responden. In *Wanita Kota Jakarta: Kehidupan Keluarga dan Keluarga Berencana*, edited by Julfita Rahardjo et al. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Roosmalawati. 1979. Migrasi Orang Bugis ke Jakarta: Suatu Pendekatan Antropologis mengenai Masalah Pola Perpindahan Orang-Orang Bugis Keluar Daerah Asalnya. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Selltiz, Claire; Wrightsman, Lawrence S.; and Cook, Stuart W. 1976. *Research Methods in Social Relations*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Sethuraman, S. V. 1976. *Jakarta: Urban Development and Employment*. Geneva: Interna-

- tional Labour Office.
- Sis, Maulud Tumenggung. 1970. *Mapalus Orang-Orang Minahasa di Jakarta*. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Speare, Alden, Jr. 1975. Interpreting the Migration Data from the 1971 Census. *Majalah Demografi Indonesia* 2(3): 66-85.
- Suparlan, Parsudi. 1963. *Masyarakat Sangir Talaud di Tanjung Priuk: Dengan Latar Belakang Masyarakat Sangir Talaud di Sangir Talaud*. Unpublished M.A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Teeuw, A. 1967. *Modern Indonesian Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Thomas, Lynn. 1977. *Kinship Categories in a Minangkabau Village*. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of California, Riverside.

(加藤 剛)